

Title	ジョージ・エリオットと天職を求める女性達：『ミドルマーチ』を中心に
Sub Title	George Eliot and women in quest of vocation
Author	高松, みどり(Takamatsu, Midori)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1992
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.61, (1992. 3) ,p.236(19)- 254(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00610001-0254">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00610001-0254</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ジョージ・エリオットと天職を求める 女性達——『ミドルマーチ』を中心に

高松みどり

George Eliot の *Middlemarch* (1871-72) と言えば、女主人公 Dorothea Brooke を思い浮かべる読者は少なくあるまい。冒頭の Prelude で暗示され、終末部の Finale で総括されるのは、Dorothea の人生に他ならない。*Middlemarch* の中で展開される四つの主要プロットを中心に位置し、散漫に陥るかに見える全体に一貫性を与える核となっているのも Dorothea のストーリーである。更に、Dorothea Brooke は、一般に、*The Mill on the Floss* (1860) の Maggie Tulliver と並んで、George Eliot 自身の気質が反映された、半自画像的登場人物と考えられている。確かに Dorothea の真理への飽くなき追求には、福音主義キリスト教への狂信的傾倒からその放棄を経て、Strauss, Feuerbach のヒューマニズム信仰に至る、若き日の Marian Evans が明らかに投影されている。そして内容についても、Prelude と Finale から見る限り、Saint Theresa の 'epic life' を 19 世紀英国に再現したらどうなるか、つまり、熱意と資質を持った女性が、制約の多い環境の中で、いかに悪戦苦闘するか、が、George Eliot の意図であったのは、Dorothea も小説の最初に 'I should see how it was possible to lead a grand life here—now—in England.' (3章 p. 28) と言う様に明白である。<sup>1)</sup>

George Eliot にとって、女性と、社会に貢献し得る仕事 (vocation) の問題は、彼女自身女性であることもあり、当然身近な問題であった。しかしながら、Eliot の言う、'Woman Question' に対する彼女の姿勢は、常に ambivalent であり、例えば、友人で、19 世紀英国婦人解放運動の先駆者

であった、Barbara Bodichon のそれとは、一線を画していた。この ambivalence は、当然のことながら、作者の Dorothea Brooke の扱い方に表われる。当稿では、George Eliot の 'vocation' に対する意識と、Dorothea の vocation 希求との間に生ずる間隙を浮かび上がらせながら、Eliot の ambivalence がいかに *Middlemarch* の中に反映され、Dorothea Brooke が作者の女性に対する曖昧な態度に翻弄されているかを考察したい。

## (I)

George Eliot の、いわゆる 'Woman Question' に対する不明瞭な態度の現われは、当時の女性達による、婦人参政権要求の運動や、女子教育改善の為の運動に対する、手紙の中でのコメントや、寄稿エッセイ、又、手紙に記された様々な女性に対する印象記から伺うことができる。この章ではまず、それらを年代順に概観してみたい。最初期の記録は、1848年の手紙に示された、Hannah More への嫌悪感で、18世紀の bluestocking の先駆者に対して、この上なく辛辣な評価を下している。Eliot が、*Westminster Review* の編集をしていた1853年には、友人で、女権論者の Mrs Peter Taylor に、「婦人参政権賦与の運動は、微微たる進展を見せているに過ぎないが、それが一番良いのです。なぜなら、女性はまだ、男性から与えられる以上の運命を受けるに値しないのですから。」と書いている<sup>3)</sup>。1854年、Eliot は、George Henry Lewes との同棲生活を始め、彼女自身の人生が新たな段階に入る。この頃のエッセイ 'Woman in France: Madam de Sablé' では、警句集で知られる17世紀フランスの Madam de Sablé の資質を、彼女の得手は、自分が書くことより、他者が書くようにしむけることだと評した後、続ける。「彼女は、男性の知力を、そののみこみの良さ (understanding) で助けた。この理解力とは、女性的な知性が文化の発展に寄与してきた、最良の役割の一つである。彼女には独創力が欠けている為、他者の独創性に対する受容力が一層増したのだ。」この独創性の欠如は、Dorothea に見られるもので、世俗的だが、常識に裏打ちされた

冷徹な眼を Dotothea に向ける妹 Celia は、それを直観する。<sup>5)</sup>

1856年9月には、George Eliot は、最初の作品 ‘The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton’ に着手する直前に、辛辣な女流小説家批評、 ‘Silly Novels by Lady Novelists’ を書いている。四方に多くの称賛者達を従え、才色兼備で、その上敬虔な女相続人が通常、こうした小説の女主人公になるのだと語った後、Eliot は、こう続ける。「女主人公は、哲学者達の浅薄な論を見抜き通す深い洞察力を備えているものと見なされる。彼女の優れた直観力は、男達が、ただそれによって自分達の時計を合わせさえすればよい一種の日時計なのであり、万事はそれでうまくゆくだろう。」<sup>6)</sup>しかし、当代の女流小説家達の小説を、 ‘silly’ だと感じるということは、同時に、Eliot 自らの理想とする小説観が育ちつつあったことをも意味する。Eliot は同時代の様々な作家の小説を読み、それらを批判して行く中で、自分の小説観、そして、描かれるべき女主人公像を形成していったのである。このエッセイとは別に、この頃の手紙の中で、批難の矛先は、Mrs Gaskell にまで向けられ、*Ruth* は、女流作家にありがちの、偽りの弱々しい描写の所産であり、Mrs Gaskell は ‘subdued colouring’ に満足できずに、 “‘dramatic’ effects’ を好んだため、方向を誤ったのだ、と評価している。<sup>7)</sup>

こうして批評によって Eliot の小説観は明確化され、最終的に辿り着いたのが、リアリズム作家としての自己の姿勢であった。 ‘romance’ や、 ‘idyl’ ではなく、実際の ‘observation’ に基いて、あるべき状態でなく、あるがままの状態、あるいは、あった通りの状態を示そうというこの態度を、Eliot は *Scenes of Clerical Life* (1858) に始まる自分の小説で、実践して行くことになる。<sup>8)</sup> 女性作家の弱点をあらかじめ認識し、それを超えようと最初から意図して小説を書き始めた女性作家、George Eliot の、女性の登場人物の描き方が単純でないのは当然であろう。

個人として、リアリズム芸術家としての指針を獲得し、Marian Evans から、Marian Lewes を経て、小説家 George Eliot となった彼女は、第二作目の小説 *Adam Bede* を書き始めていた 1857年10月30日、Charles

Bray 宛の手紙で、女性一般の問題について明言する。‘But I should be sorry to undertake any more specific enunciation of doctrine on a question so entangled as the “Woman Question.”’<sup>9)</sup> これは、この頃出版された、Barbara Bodichon の、*Women and Work* (1857) の中の引用文を巡っての意見である。Barbara Bodichon は、1850年代半ばに、既婚婦人財産権運動を推進していた婦人問題の先駆者で、女性は「家庭の天使」であらねばならないとする当時の道徳観に真向から反発し、結婚だけを人生の目的と考えずに、女性も労働すべきだと賞揚するなど、最も急進的な女性達の一人であった。George Eliot もおそらくこの本を目にしたと思われるが、この手紙で話題となっている、Eliot が探して Bodichon に教え、Bodichon が本の中で使ったという引用文は、後に明確化する Eliot の vocation に対する考え方を先取りしている。‘People are grasping after some grandiose task, something ‘worthy’ of their powers, when the only proof of capacity they give is to do small things badly.’<sup>10)</sup> 丁度この時書き始めていた *Adam Bede* で、Eliot が、対照的な二人の女性登場人物——Eliot の小説に初めて登場する、説教師という vocation と、天職意識を持った女性 Dinah Morris と、無知の為、悲劇的運命に陥る Hetty Sorrel——の構想を練っていたことと、Bodichon の急進的な女性論を考え合わせると、興味深い。又、大袈裟な大義や理想に固執してまずい仕事を成すよりは、小さな仕事を着実に積み重ねる方が社会に貢献できるという Eliot の基本姿勢が既に形成されていたことがわかる。

*Adam Bele* (1859) が大成功を取めた後、*The Mill on the Floss* (1860) から、*Felix Holt* (1866) にかけて、1860年代には大作家としての地位を確立するに至った Eliot は、Lewes との違法な関係の為彼女を疎外していた世間を、実力で屈服させる。このような傑出した存在が、女権拡張論者達の注目を集めない筈がなかった。彼女達は、Eliot の運動への協力を求めてきたが、Eliot は、婦人参政権問題には、あくまで消極的な態度を崩さず、運動を主導する女性達と全く異なる生き方をする大多数の一般女性に参政権を与えても、それは ‘extremely doubtful good’ だとし

11) た。Girton College の創設者 Emily Davies には、女性と男性の肉体的、心理的差異、それに基づいた精神文明——つまり、女性らしさや母性の重要性を主張する伝統——の豊かさを肯定する自らの立場を表明している。

We can no more afford to part with that exquisite type of gentleness, tenderness, possible maternity suffering a woman's being with affectionateness, which makes what we mean by the feminine character, than we can afford to part with the human love, the mutual subjection of soul between a man and the woman....

Eliot が唯一積極的な態度を示したのは、女子教育の改善に対してであった。女性も男性と同じ教養の基礎を持つことで、男女が同じ判断基準を持つ状態を、Eliot は理想と考えたのである。彼女は更に続けて述べる。

The answer to those alarms of men about [women's] education is, to admit fully that the mutual delight of the sexes in each other must enter into the perfection of life, but to point out that complete union and sympathy can only come by women *having opened to them the same store of acquired truth or beliefs as men have, so that their grounds of judgement may be as far as possible the same.* <sup>12)</sup> (強調は筆者による)

Dorothea Brooke は、Casaubon と結婚して、'lamp holder' として研究の補佐をし、過去の再構築という、Casaubon の遠大な目的を分かち合うべく、ギリシア語、ラテン語を学ぼうとする。そして又、Will Ladislaw から、Casaubon はドイツ語を知らない為、ドイツのより先進的な神話学の業績を知らずに、前世紀既に研究された事を遅れてなぞっているに過ぎないと聞くと、Dorothea は、スイスで教育を受けていた時にドイツ語を自分が勉強しておくべきだった、と悔やむ。Dorothea が、彼女を真理に

導く教育者を、Casaubonに見出したのは、そのスイスでのピューリタンの教育的教育の底の浅さを示す。このように、男女が教育によって、‘the same store of acquired truth’を持つことを理想として掲げながら、Eliotは決してヒロインにそれを実現させ得る教育を施さない。この理念と、小説での現実との間の溝に、Dorothea以外のEliotのヒロイン達も呑み込まれるのである。

自分自身は、タブーを全て実践しながら成功者となったのに、小説で描くヒロイン達の運命には、自身の例を全く反映させないEliotの姿勢は、フェミニズム批評家を中心に議論的となってきた。Sandra M. GilbertとSusan Gubarは、Eliotは、自分の努力と、作家としての成功を、女性の限界を超越する異例な事として是認しようと努め、積極的に切り開いてきた自身の人生と相反する、服従や、女性らしい諦念といった教訓に主要な小説中でしばしば頼る、と指摘する。<sup>13)</sup>Zelda Austenは、小説に書かれた内容は、読者にとっては規範となる傾向があるので、因襲に捕らわれないヒロインが挫折し、因襲に素直に従う女達が安穩に暮らす小説をEliotが書いた事によって、後者の生き方を規範化することになりかねない、と説く。<sup>14)</sup>

しかしながら、この問題を解く鍵は、George Eliot自身の言葉の中に、明瞭に現われている。Eliotは、婦人参政権運動についてJohn Morleyと議論し、女性が男性より悪い分け前を担っている事実は、女性にはより崇高な忍従を、男性にはより再生力のある優しさが求められる理由となるべきである、と保守的な見解を示した後、付け加える。‘The peculiarities of my own lot may have caused me to have idiosyncrasies rather than an average judgement.’自分の、困難を乗り越え成功者となった運命は、特殊な例であるので、自分の女性の問題に対する見解も、一般の女権論者とは違った、特異性(idiosyncrasies)を帯びたものになってしまうというのである。<sup>15)</sup>個人的に特異性を享受したEliotは、他方でリアリズム芸術家を自認していた為、ますます自己の特異性を現実離れした奇跡、とやや自意識過剰気味に見るようになる。その為、他の女性や、彼女の小説

のヒロイン達が、彼女のように真理を追求することに対して、現実の厳しさを投げかけずにはいられなかったように思われる。

更に、特異性を享受して、一般の女性の状態を超越するということは、男性と同様の状況を生きるということになるので、Eliot は女性でありながら、男性の立場から、男性社会の厳しい現実を体験できた。従って、大多数の女性に、教育的基礎が無いにもかかわらず、進歩的な女性が行っている様に、声高に権利の要求ばかりしても無意味だと認識できたのかもしれない。1868年3月、Eliot は、Barbara Bodichon に次のように述べている。

What I should like to be sure of as a result of high education for woman—a result that will come to pass my grave—is, their recognition of the great amount of social unproductive labour which needs to be done by women, and which is now either not done at all or done wretchedly. No good can come to women, more than to any class of male mortals, while each aims at doing the few can do well. I believe—and I want it to be well shown—that a more thorough education will tend to do away with the odious vulgarity of our notions about functions and employment, and to propagate the true gospel that the deepest disgrace is to insist on doing work for which we are unfit—to do work of any sort badly.<sup>16)</sup>

*Middlemarch* は正に、Eliot のこの主張を反映した小説、と言っても過言ではないだろう。登場人物は皆、自分の成すべき仕事、居るべき場所、就くべき地位を模索している。Dorothea のように、社会に貢献する仕事の一翼を担いたいと願う者もいれば、Rosamond Vincy のように、自分の所属する階級の上昇のための結婚を目指す者もいる。又、男性では、Lydgate のように、医師という vocation に初めから就いていても、時々



現われる俗物性 ‘the spots of commonness’ の為に、当初の目標——病理学の研究と病院の建設——が挫折する者がある。他方では、Fred Vincy のように、息子の、所属階級からの昇格を願う父親の望んだ、聖職者となる道を捨て、Caleb Garth の土地測量、評価の仕事の補佐という、より適した職業を、婚約者の女性の高い道徳性に導かれて見出す若者もいる。次章では、Dorothea の場合に絞って、彼女がいかにして、居るべき場所、成すべき事の探求の旅に出てその迷路を辿るのか考察したい。

## (II)

*Middlemarch* は、その冒頭で結末を提示し、そこに至る過程を中で描くタイプの小説である。なぜなら *Prelude* で、まず16世紀の聖女 Saint Theresa の ‘an epic life’ がモデルとして示され、‘later born Theresa’ である Dorothea Brooke が、周囲の社会が協力的でない為に、その熱意 ‘ardour’ が、‘a vague ideal’ と、‘common yearning of womanhood’ の間で揺れ動き、Saint Theresa が彼女の vocation である教会改革の内に見出した ‘epos’ を見出し得ない、と語られるからである。続く第1章は、当の Dorothea Brooke を形造る要素が凝縮されて提示される章である。何げない彼女の衣服の記述、‘her plain garments, which gave her the impressiveness of a fine quotation from the Bible, —or from one of our elder poets,— in a paragraph of to-day’s newspaper.’ (1章 p. 7) さえ、彼女が同時代にそぐわない人物であり、現代の文脈では、‘quotation’ であって、‘original’ でないという本質を暗示している。かつて Cromwell の下に仕えた清教徒で、後に国教会に改宗し、政治から身を引いて地主に取まったという Brooke 家の祖先の経路は、過激なエネルギーを持ちながら、大きな挫折を経て全く方向転換しまう点で、Dorothea の人生を予見させる。Eliot は、こうした暗示を、現在の事実をまず述べた後、付け加えるように述べられる次の叙述の中に密かに滑り込ませる。例えば、次の叙述にそれが見られる。

Her mind was theoretic, and yearned by its nature after some lofty conception of the world which might frankly include the parish of Tipton and her own rule of conduct there; she was enamoured of intensity and greatness, and rash in embracing whatever seemed to her to have those aspects; likely to seek martyrdom, to make retractions, and then to incur martyrdom after all in a quarter where she had not sought it. (1章 p. 8)

後半 'likely' 以下に示される様に、彼女には 'theoretic' な精神があり、何か崇高な理念に夢中になるが、それを取り消し (retraction) して、全く考えていなかった方向に、その理想を転換する潜在性が最初からある。

続いて、財産と美貌を兼ね備えた彼女の結婚の妨げとなるのは、極端を好み、持論 'notion' に基づいた人生を送りたいという願望であると述べた上で、Eliot は女性が意見を持つことについて、冷静に語る。

Women were expected to have weak opinions; but the great safeguard of society and of domestic life was, that opinions were not acted on. Sane people did what their neighbours did...

(1章 pp. 9—10)

女性は、あまりはっきりした意見を持たないことが望まれるが、たとえ、Dorothea のように、確固たる意見を持つ女性がいたとしても、世間はいちいち耳を貸さないので問題はないというのである。

次に、Dorothea の乗馬愛好と、それを「異教的で感覚的に」( 'a pagan sensuous way' ) 楽しむ事は良くないので、やめようと思う話と、宝石の輝きに、思わず心を奪われるエピソードから、Dorothea が、'theoretic' で持論に固執する一方、非常に感覚的な面も持っていることが明らかになり、Celia は、それを矛盾していると考える。その直後、第2章で、'I live too much with the dead,' と自ら語る術学者 Casaubon が登場、

Dorothea は、彼が ‘a view to the highest purposes of truth’ を持って大事業に取り組む人、という幻影を抱き心引かれる。崇高な理念を好む Dorothea の性向が Casaubon に注目させたのは勿論である。その一方無視できないのが、彼女に求婚する機会を伺っている Sir James Chettam が代表する世間、特に、男性社会の常識と伝統の力である。Sir James は、Dorothea の過度の信心深さは、結婚すれば消滅するだろうと思い、彼女が何事にも意見を持っていると言っても、所詮は女の意見、男社会の伝統の前には取るに足らぬものとする。

Sir James had no idea that he should ever like to put down the predominance of this handsome girl, in whose cleverness he delighted. Why not? A man's mind —what there is of it— has always the advantage of being masculine, —as the smallest birch-tree is of a higher kind than the most soaring palm,— and even his ignorance is of a sounder quality. Sir James might not have originated this estimate; but a kind Providence furnishes the limpest personality with a little gum or starch in the form of tradition. (2章 p. 21)

Dorothea が無意識のうちに逃れようとしているのは、この男性優位の ‘tradition’ の力であるように思われる。彼女にとって、乗馬は ‘tradition’、又は世俗性の象徴であり、それをやめるのを咎め、理由を追求する Sir James を止めるのが Casaubon である。そこで、Dorothea は、Casaubon が ‘higher inward life’ を解し、‘spiritual communion’ を共にできる男性であると錯覚するのである。

父親のようであり、望めばヘブライ語も教えてくれる教師のような相手と結婚したいという Dorothea の子供じみた結婚観が、Casaubon を理想視させたのも事実であるが、Casaubon の存在は、Sir James や、その背景にある世間との対比により、Dorothea の目に、より好ましい相手として映

るのである。後に、Casaubon が、自己中心的で、愛情も乏しく、その研究にも価値がないことを知って幻滅した Dorothea が、Will Ladislaw に親近感を抱くのも、Casaubon と Will の対比—Will は、‘sunny brightness’, Casaubon は、‘rayless’ (21章 p. 203) —によってである。この間、Dorothea が一貫して求めているのは ‘spiritual communion’ で、これは、前章で述べた通り、George Eliot が理想とする男女の関係と一致する。Eliot は、communion の手段として、女子教育の改善を考えましたが、Dorothea は、崇高な目的のための手段、そして、世俗性を脱した ‘spiritual communion’ を夫と分かち合う手段として、‘knowledge’ を希求し、それを、まだこの時期、‘anti-reform times’ で学校教育に求められない為、教師の役割を兼ねる夫に求めたのである。

しかしながら、Dorothea にとっての ‘knowledge’ とは、夫の補佐の為だけではなく、自分自身の真理探求欲を満足させる為の手段であることも忘れてはならない。それは次の叙述に現われる。

[B]ut it was not entirely out of devotion to her future husband that she wished to know Latin and Greek. Those provinces of masculine knowledge seemed to her a standing-ground from which all truth could be seen more truly. As it was, she constantly doubted her own conclusions, because she felt her own ignorance... Perhaps even Hebrew might be necessary—at least the alphabet and a few roots—in order to arrive at the core of things, and judge soundly on the social duties of the Christian. And she had not reached that point of renunciation at which she would have been satisfied with having a wise husband: she wished, poor child, to be wise herself. (7章 p. 63)

(強調は筆者による)

事物の核心に到達すること、つまり、真理の探求は、George Eliot が生

涯行ってきたことであるが、‘poor child’ という口調からして、そのことがいかに大きな代償、苦勞を伴うかを、先駆者として、共感を込めて語っているかのようである。続いて、Dorothea と Celia の比較から述べられる、‘To have in general but little feeling, seems to be the only security against feeling too much on any particular occasion.’ は、Eliot のヒロイン達、Janet Dempster, Maggie Tulliver, Romola, Mrs Transome, Dorothea, Gwendolen Harleth, そして、ヒロインではないが、Lydgate らが共通して直面する困難である。抑制されたり、型にはめられるのを拒む、大きすぎる情熱や感受性を持つ人間に対して、社会はその受け皿を持たず、彼女らを受けとめ ‘spiritual communion’ を共有できる伴侶を見出すのは、非常に難しいのである。

Dorothea Barrett は、Dorothea が、80章で、特に顕著に示す、ヒロインの縮小化(diminution)を問題にしている。Will Ladislaw が Rosamond と会っているのを見て、裏切られたと思いつく80章では、Dorothea の姿は堂々として彫像のようで、‘her grand woman’s frame’ と記されながら、83章で、Will の求婚を受け入れる場面では、Dorothea は ‘childlike’ と記述される。その他、Dorothea は感情が高揚する場面では、常に ‘childlike’ と形容されるのである。この、Eliot が感情的場面で子供のイメージを用いる傾向は、F. R. Leavis, Barbara Hardy によっても指摘されてきた。Hardy は、Eliot が love-scene を無垢な子供のイメージに矮小化<sup>17)</sup>するのは、性を扱う上での彼女の弱点と見ている。他方、先の Barrett は、Eliot がヒロインを ‘childlike’ と記す時、ヒロインを無性化しているのではなく、彼女達が自意識を忘れ、自己の動機に正直になっていることを示すのだと解釈<sup>18)</sup>している。しかし、このイメージは、ある意味では、ヒロイン達の過剰なエネルギーを、他の普通の人物を描くと同様の叙述では描き得ないことを認識した筆者の、自嘲的な表現法とも考えられるのではないだろうか。

Dorothea Brookeの社会貢献の方法にしても、彼女の感受性のスケールがもっと小さければ、富裕な lady らしく、‘village charity’ に専心する

(12)

という道もあった。しかし彼女はそれには到底満足できず、彼女の心には霏のような曖昧さがたち込め、‘What could she do, what ought she to do?’ を呪文のように繰り返すのである。

### (III)

Dorothea の対極に位置する女性が、Garth 家の Mary Garth である。Rosamond Vincy も、その世俗性——manufacturer の娘から、より上の階級に上がりたいが為に、種々雑多な稽古事、(accomplishments)に手を染め、条件の良い結婚相手を待つ、典型的な ‘silly novel’ に登場しそうな女性——においては、Dorothea と正反対である。しかし、Mary Garth は、大袈裟な大義を掲げず、できる範囲の仕事を自らの義務と課して行なうという面で、Dorothea と対照的である。Fred Vincy が、男は愛されていなければ、‘he could be a better fellow’ と言っても無駄だと訴える時、Mary が、‘Not of the least use in the world for him to say he *could* be better. Might, could, would—they are contemptible auxiliaries.’ と答えるのは、Dorothea の ‘What could she do?’ と対照的である (14章 p.136, イタリックは Eliot による)。David Daiches は、Garth 家の人々は、この小説の ‘moral centre’ を成し、彼らに対する態度で、その人のモラルが試されるとする。Daiches は、Lydgate が Mary Garth に注目しなかったのは、このテストに失敗したのを意味するとし、実質よりも体面を気にする Lydgate の ‘commonness’ について述べた後、指摘する。‘George Eliot is interestingly original in seeing a refusal to understand the economic realities that underlie class distinction as a sort of vulgarity.’<sup>19)</sup>

Eliot は一般に所属階級の上昇を夢見る者、経済的現実を疎かにして上辺を取り繕おうとする者、遺産など、他者からの経済的援助を当てにする者に対して非常に手厳しい。キリスト教信仰の放棄云云に関係なく、Eliot の根底に流れる、ピューリタンのプラグマティズムがそこにあるように思われる。名よりも実を重んじる為、賭での儲けを財政の足しにする牧師の

Farebrother を、他の点ではいかに仁徳者であっても、尊敬できない Lydgate は、自分の方が財政状態にそぐわない贅沢な生活をして困窮に陥る。又、Featherstone の遺産を当てにして、‘vulture’ のように群がる親類達は、茶番を演じた末、一銭も入らないことになる。

Garth 家のモラルの支柱は、主 Caleb Garth の ‘business’ 信仰である。彼にとっての ‘business’ とは、直接的には、彼の職業である建築、測量関係の仕事を指すが、ハンマーの音を麗わしい音楽と聞く彼の、 ‘virtual divinities’ は、 ‘good practical schemes, accurate work, and the faithful completion of undertakings’ である (24章 pp. 246-247)。怠惰を嫌悪し、経済的必要の為でなく、使命感を持って仕事に取り組む Caleb Garth は、Walter E. Houghton の言う、 ‘mission’ 意識を伴った Victoria 朝人の職業意識を見現化している。<sup>20)</sup>

この ‘mission’ 意識を伴う職業観、つまり、生計を立てる為の ‘occupation’ ではなく、 ‘vocation’ に携わっているという意識は、Lydgate にも共通する。しかし、厳密に言えば、Caleb Garth の ‘business’ と Lydgate の ‘profession’ の間には違いがない訳ではない。主として、*Middlemarch* における男性の登場人物の vocation を論じている Alan Mintz によれば、この小説の世界は、職業の専門細分化時代の入口にさしかかった世界である。Caleb Garth の漠然とした ‘business’ は、Eliot のノスタルジアの産物で時代遅れであり、他方 Lydgate の失敗の原因は、研究医学と臨床医学の両方に一度に取り組んだためであると Mintz は分析する。<sup>21)</sup> Sir James のような上流階級に属する人間も、この時代の改革 (reform) の波に無関心でいられず、改良農業に着手する。こうして男達が仕事を巡って試行錯誤している間に Dorothea に起こった変化を最後に考察したい。

#### (IV)

Dorothea を巡るプロットは、小説全体に一貫性を与えるものではありながら、vocationの問題に関しては、周囲の人々が男も女もより適した仕事や役割を求めて動き回る中心で、台風の目のように虚空を示している。

大きすぎる感受性同様、大きすぎる社会貢献への欲求に答える手段がないのである。身近な貢献を試みようとしても、Casaubon 邸のある Lowick は恵まれた村で、彼女の奉仕の余地はない。Casaubon の研究の真価を知り、Casaubon に対する気持は同情的なものに変わっていたが、Casaubon は、他者の共感や同情を何より恐れたので、Dorothea の根源的欲求である他者への共感は満たされない。

ここで Dorothea の行動の原動力、‘sympathetic motive’ に注目する必要がある。

All her eagerness for acquirement lay within that full current of *sympathetic motive* in which her ideas and impulses were habitually swept along. She did not want to deck herself with knowledge... and if she had written a book she must have done it as Saint Theresa did, under the command of an authority that constrained her conscience. (10章 p. 85, 強調は筆者による)

従って、Dorothea が求める仕事とは、‘sympathetic motive’ に根ざしたものでなければならない。Dorothea の潜在的エネルギーは、無意識のうちにもこの動機のはけ口を見出そうとしているので、事態の急激な変化や、危機的局面によって、あるはけ口が行き詰まると、途端にダイナミックな動きを見せつつ、別のはけ口へとなだれ込む。従って、Will から Casaubon の仕事の無意味を聞き知ると、‘sympathetic motive’ は、Casaubon の仕事を助けようという方向を閉ざされ、瞬時に彼への憐憫の情へと切り替わる。(21章, p. 203)

Rosamond と Will の密会を目撃した直後、それまで Will への愛情に向けられていた ‘sympathetic motive’ が、危機的事態に行き詰まると、行き場を失ったそのエネルギーは、即座に新しいはけ口が見出せず、異常な活力となって噴出する。が間もなく、Bulstrode の Raffles 殺害への加担の嫌疑がかり、医師のキャリアが試練の下にありながら、妻 Rosamond



にないがしろにされた Lydgate への同情という、新しいはけ口を見つける。

It was as if she had drunk a great draught of scorn that stimulated her beyond the susceptibility to other feelings. She had seen something so far below her belief, that her emotions rushed back from it and made an excited throng without an object. She needed something active to throw her excitement out upon.... And she would carry out the purpose...of going to Freshitt and Tipton to tell Sir James and her uncle all that she wished them to know about Lydgate.... (77章, p. 765)

不毛な Casaubon との結婚生活から Dorothea が得たのは、'knowledge' ではなく、その苦悩を通して得た、他者の公的生活、(職業に基づく生活) と私的生活(愛情に基づく生活)への洞察力で、これが、彼女を 'theoretic mind' の egoism から解放し、他者の苦悩を共感すること—Eliot の小説で、登場人物が達成すべき共通の課題—を可能にしたのである。Dorothea の底流を流れるリビドーの様な 'sympathetic motive' は、この結婚によって陶冶されたのである。

Mintz は、もはや女性への求愛を描くロマンスの時代は終わり、現代社会における男性の関心は仕事なので、文学が扱う対象も、職業を巡る生活に向けられるべきだ、と説くが、これはやや誇張で、*Middlemarch* においては、仕事と愛情の両方が、登場人物の人生を左右する欠くべからざる二大要素である。表面上、社会生活の中で、目に見えて現われる方が前者、<sup>22)</sup>個々の心理の中に潜在し、表面には現われないが、内部から行動の原動力となっているのが後者、と考えた方が良いだろう。仕事と愛情は表裏一体なのである。Casaubon は、研究に行き詰まり、愛情の生活を享受することで、それを解消するべく Dorothea と結婚したのに、彼女は 'critical wife' で、触れられたくない仕事の生活にばかり干渉してくることにたじろぐ。Lydgate の研究生生活を疲弊させ、破壊するのは、Rosamond の子供

(16)

じみた独善性と関わっていかねばならない愛情生活であった。諦念 (renunciation) を持つのは、Eliot の大志を持ったヒロイン達だけではない。Lydgate も、結婚生活に諦念を持って耐え、'life must be taken up on a lower stage of expectation' と、嘆息するのである (64章 p. 639)。

Dorothea の vocation を求めての長い旅路は、大それた偉業への関与ではなく、Lydgate 夫妻を通しての小さな貢献——Lydgate の嫌疑を晴らそうと働きかけ、Rasamond に、一種の結婚哲学を説き、固い Rosamond の egoism の殻に衝撃を与え、啓示をもたらしたこと——へと辿り着き、最終的には、Will Ladislaw と結婚し、国会議員の妻となり、母となることで終わる。この間、前述の 'spiritual communion' は、Will でなく、Lydgate との間に現われる。

Lydgate は、Dorothea を、Sainte Theresa ではなく、聖母マリアのようだと思い、男性との間に友情を育める女性に初めて会ったと思う (76章 p. 758)。Lydgate が Dorothea に、聖母マリアを見たのは、二つの点で意義深い。第一点は、子を生み、母親となる Dorothea は、Lewes との違法な関係のため、子供を持たないことにしていた Eliot の屈折した感情——子供を持たない愛情に対するコンプレックス——の反映と考えられる事である。<sup>23)</sup> Dorothea は聖女ではなく、聖母の像に昇華されるのである。第二点は、Will が、Dorothea の新婚旅行先のローマで、彼女を感情の生活に開眼させるきっかけとなる美学談議の最中、Dorothea が、自分には詩作はできない、と言ったのに対して、'You are a poem.' という Will の答えに象徴される事——創造者ではなく、nature の創造物として女性を見る、女性観一である (22章, p. 218)。

騎士道的な Will の Dorothea 称賛の言葉も、聖母マリアのイメージも George Eliot が Dorothea に対してこれらを同一視しているとすれば、Eliot は、同性の視点というより、男性の視点から Dorothea を見ていることになる。社会の疎外を生き抜き克服したが Eliot が自己を投影しようと思ふ気持と隠蔽しようとする気持の相克の中から生まれた産物こそ Dorothea Brooke なのであろう。

註

- 1) George Eliot, *Middlemarch*, ed. David Carroll (Oxford: Clarendon Press, 1986). 以下 *Middlemarch* からの引用は全てこの版による。
- 2) 1848年2月11日 John Sibree Jr. 宛の手紙で Eliot は, 'She was the most disagreeable of all monsters, a bluestocking—a monster that can only exist in a miserably false state of society, in which a woman but a smattering of learning or philosophy is classed along with singing mice and card playing pigs.' と評している。  
George Eliot, *The George Eliot Letters*, ed. Gordon S. Haight. (New Haven: Yale University Press, 1954) I 245.
- 3) *Letters*, II 86.
- 4) George Eliot, *Essays of George Eliot*, ed. Thomas Pinney (London: Routledge and Kegan Paul, 1963) p. 74.
- 5) *Middlemarch*, Chapter 5 p. 46. 'Celia inwardly protested that she [Dorothea] always said just how things were, and nothing else: she never did and never could put words together out of her own head.'
- 6) *Essays*, p. 302.
- 7) *Letters*, II 86.
- 8) *Scenes of Clerical Life* 完成後, Eliot は出版者 John Blackwood 宛に自らのリアリズム芸術家としての立場を表明した。'Art must be either real and concrete, or ideal and eclectic. Both are good and true in their way, but my stories are of the former kind. I undertake to exhibit nothing as it should be; I only try to exhibit some things as they have been or are, seen through such a medium as my own nature gives me.'  
*Letters*, II 362.
- 9) *Letters*, II 396.
- 10) *Ibid.* この引用文は, Mrs. Jameson の *Communion of Labour* からのもの。Barbara (Leigh Smith) Bodichon, *Women and Work* (London: Bosworth & Harrison, 1857) 参照。Eliot と婦人解放運動家の女性達との関係については, Gillian Beer, *George Eliot* (Brighton: Harvester Press, 1986) 6章 "Middlemarch and 'the Woman Question'" 参照。
- 11) 1867年10月12日付 Sara Hennell 宛。 *Letters*, IV 390.
- 12) *Letters*, IV 468.
- 13) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic* (New Haven and London: Yale University Press, 1979) p. 466.
- 14) Zelda Austen, 'Why Feminist Critics are Angry with George Eliot,' *College English* vol. 37 no. 6 (February, 1976) p. 554.

- 15) Gordon S. Haight, *George Eliot: A Biography* (Oxford: Clarendon Press, 1968) p.396. 1867年5月14日付 J.Morley 宛の手紙。
- 16) *Letters*, IV 425.
- 17) F.R.Leavis, *The Great Tradition* (1948; London: Chatto & Windus, 1979) pp.74-75.  
Barbara Hardy, *The Novels of George Eliot* (1959; London: Athlone Press, 1981)
- 18) Dorothea Barrett, *Vocation and Desire: George Eliot's Heroines* (London and New York: Routledge, 1989) pp.19-21.
- 19) David Daiches, *George Eliot: Middlemarch* (1963; London: Edward Arnold, 1982) p.47.
- 20) Walter E. Houghton, *The Victorian Frame of Mind, 1830-1870* (1957; New Haven and London: Yale University Press, 1985) p.244, 'The word "mission" is important. A Christian was not only to work (as opposed to being idle), but to work in the right spirit—that is, with the sense of having a purpose or mission for which he had special gifts and to which he was dedicated: the service of God in his secular calling.'
- 21) Alan Mintz, *George Eliot and the Novel of Vocation* (Cambridge, Mass. and London: Harvard University Press, 1978) p.14.
- 22) *Mintz*, p.55.
- 23) Eliot のこのコンプレックスに関しては、例えば Mrs.Pattison 宛1869年8月10日付の手紙でこう述べている。  
'But in proportion as I profoundly rejoice that I never brought a child into the world, I am conscious of having an unused stock of motherly tenderness, which sometimes overflows....'  
*Letters*, V 52.